

文部科学省 平成27年度採択「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」

[学生]×[地域創生を志す者たち]
はばたけ
地域創生士! サミット



実施報告書



CONTENT

開会挨拶	2
来賓挨拶	3
はじめに	4
基調講演	5
事例発表	8
鼎談・クロストーク	18
まとめ	20
ワークショップ	21
地域創生を志す私たちの「ことば」	22
閉会挨拶	25

ふくいCOC+事業推進協議会
ぎふCOC+事業推進コンソーシアム

「学生」×「地域創生を志す者たち」
はばたけ地域創生士! サミット

実施報告書

文部科学省 平成27年度採択
「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」

[学生]×[地域創生を志す者たち]

はばたけ
地域創生士! サミット
実施報告書



編集・発行 / 福井大学総合戦略部門COC推進室

編集・発行 / 平成31年1月発行
福井大学総合戦略部門COC推進室
〒910-8507 福井市文京3丁目9番1号
※ふくい地域創生士は、福井大学の登録商標です。

開会挨拶

福井大学長 眞弓光文



福井県では平成27年度から福井県内の4年制大学、福井大学、福井県立大学、福井工業大学、仁愛大学、敦賀市立看護大学の5大学が協働して地域を創生する人材を育成する文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+事業)」に取り組みんでいます。ふくいCOC+事業は福井県、地域の産業界、各種団体等々の連携のもとに地域に関心を持ち、理解を深める地域志向科目を5大学の学生に提供し、彼らが卒業後も福井県に根付き、地域の持続的発展を担う人材となることを目指しています。同時に地域でのフィールドワークやインターンシップを実施して、座学だけでは得られない地域の課題を解決する能力を身につけた人材を育成するという福井の特色を生かした取り組みも進めています。

さらにふくいCOC+事業ではこうした学びを通して地域を創生できる力を育んだ学生に対して、「ふくい地域創生士」の資格を認定することとし、本年2月に第一期生として、連携するCOC+参加大学全てから50名の学生に授与したところです。

今回お集まり頂いた他地域のCOC+事業においても、同じような趣旨の資格を認定されています。本日は、その中で、5つの地域の学生から地域ごとの地方創生への思いを直接聞くことができる機会を設けました。このような交流によって地域を創生する力を持つ学生がさらに増えて、さまざまな地域で地方創生のリーダーとして活躍していただくことを強く願っております。



平成30年11月13日、14日に全国でCOC+事業を展開している学生、教職員らが一堂に会した「はばたけ地域創生士! サミット」を、ふくいCOC+事業推進協議会と、ぎふCOC+事業推進コンソーシアムの共催、幹事大学の福井大学により福井県県民ホールで開催しました。県内外の30大学・行政機関・企業を含む52団体、約200名が参加しました。本実施報告書は、その概要をとりまとめたものです。

来賓挨拶

文部科学省 総合教育政策局 地域学習推進課長 中野理美氏



本日のシンポジウムは和栗百恵先生の基調講演のほか、「ふくい地域創生士」をはじめ、地域創生を志向する人材として資格認定を受けて、地域で活躍されている全国各地の大学の皆さんが一堂に集まり、それぞれの事例を発表する新しい試み、また、「未来に向けたCOC+」をテーマに鼎談・クロストークも予定されています。我が国における地方創生の在り方、地(知)の拠点として高等教育機関が果たすべき役割等について有意義なご提案、ご発表がなされると確信しております。

員が集い、学べるサテライトキャンパスとして大学連携センター(フスクエア)を開設し、若者の地元定着に取り組みんでいます。この大学連携センターでは恐竜学など福井県独自の講義を開講するほか、経営者を講師に招き、福井の産業の強みを学ぶ講義、学生と若手社会人の交流会を開催するなど大学と産業界との協働を活発に行っています。今年度は35科目の講義に、過去最高となる1548名の学生の皆さんが大学の垣根を越えて学んでおり、今後多くの学生が「ふくい地域創生士」に挑戦されることを期待しています。地

方には豊かな自然・文化・子育て世代に優しい居住環境・人と人のつながりの強さなど多様な魅力が残されています。本日お集まりの大学関係者の皆様には学生が地域の魅力に気付き、活かしていく力を育成して頂くなど、都市部の大学には真似できない教育にご尽力頂きたいと思えます。そして学生の皆さんにはそれぞれの地域が抱える課題や地域づくりについて学んで頂く、地域の産業・地域社会を担う人材として今後活躍されることを大いに期待しています。

福井大学のCOC+事業は平成27年度に地域創生の担い手を育み活気あるふくいを創造する5大学連携事業」としてスタートし、地域の産業界等と一体になって地域志向教育の充実等、さまざまな取り組みを推進されてきており、昨年度行われました中間評価でも高い評価を受けています。特に福井県のご支援によって整備されたサテライトキャンパスにおいて、地域志向教育の講義を開講しており、

5大学の学生が一堂に会して学ぶという点は、学生同士の交流なども期待され、大変魅力的な取り組みと考えています。また、インターンシップを含め、実践的なスキルを身につけるための取り組みにも力を入れられており、こうした活動に参加し、所定の要件を満たした学生を「ふくい地域創生士」として認定する制度を構築するなど、地域の持続的発展に貢献できる高い資質を備えた人材育成に取り組まれ

福井県 総務部長 櫻本宏氏



基調講演

福岡女子大学国際文理学部
准教授
和栗 百恵様



講師プロフィール

福岡女子大学
国際文理学部 准教授

和栗百恵氏

石川県小松市生まれ、東京都町田市育ち。中央大学総合政策学部卒業(第1期生)。米国スタンフォード大学大学院教育研究科修了後、スリランカや日本の国際協力NGOで経験し、中央大学、早稲田大学、大阪大学、甲南大学において「大学教育における体験的な学習」に取り組む。2009年、福岡女子大学に着任し、現在に至る。
平成29年度 地(知)の拠点大学による地方創生推進事業委員会委員。

先ほど岩井先生から「チャレンジ・オブ・コラボレーション」という言葉が出ましたが、今日は会場にいる学生や大学、企業の皆さんがお互いに力を合わせ、地域を盛り上げられるためのヒントを持って帰って頂きたいと思っています。
去年出版された「未来の年表」という本があります。「2018年、国立大学が倒産の危機へ」「2020年、出産できる女性が激減し、女性の半数が50歳超えになる」「自治体の半数以上が消滅する2040年」など、ショッキングな数字が沢山出てくる本でした。2015年には野村総研とオックスフォード大学が共同研究し、「2025年の社会では現存する仕事の約半分が代替可能となる」と発表しました。もちろん、2025年には今は存在しない仕事も登場し

基調講演

なぜ「地域創生」か？

〜来る社会と、大学教育で身につけるべき力から考える〜



オール福岡の体制でCOC+に取り組む

ふくいCOC+事業では福岡県内の4年制大学が平等互恵の精神で参画し、地域志向力・課題探求力・グローバル化対応力・地域産業振興力・起業化力を備えた地域の持続的発展に貢献できる人材を育成しています。

地域志向科目、課題探求型の取り組みを推進するためには学生たちに分かりやすいインセンティブ、モチベーションになるものが必要というところで、就職等にも活用できる資格認定制度「ふくい地域創生士」を制度化しました。今年2月に認定した第1期生は各大学から50名、そのうち44名が福岡県内の学生です。認定を受けた学生の声を紹介します。

自分の価値観が変わることにあると思う。授業やフィールドワーク、インターンシップを通して、たくさん課題に直面する過程で、物事へのアプローチや他者との関係のなかで自分の考え方を見つめ直すことでもありと思う。このような魅力をぜひ後輩に伝えたい。
こうした思いが学生たちに広がり、引き継がれていくことを心から願っています。
平成30年2月の中間評価ではありがたいことにS評価を頂きました。今後の課題は地域で彼ら、彼女達をどうやって育てたらよいか、あるいは「ふくい地域創生士」の人材像や認定要件の明確化、資格認定を受けた学生を社会に送り出すまでの間のフォローアップのあり方だと考えています。

各地の地域創生士が切磋琢磨して進化・深化

「ふくい地域創生士」とは福岡というフィールドで学んだということであって、福岡ご当地検定の合格者ではありません。地域創生士はいろんな地域それぞれに適応し、通用するものでなければなりません。

地元出身者を地元に残すための取組みではない。自分が関わっている「地域」を外から眺めることは、武者修行や短期留学に通じるものです。「地域」の良さを認識した上で、自分とは異なる物の見方や考え方を人があるという、多様性を意識することで、客観的な視点やグローバルな視点を育て、改めて「地域」の価値を再認識できるものと考えています。
その意味で地域創生士の資格を有する学生が各地から集まっ



福井大学 理事(研究・産学・社会連携担当)・副学長 岩井善郎

はじめに
「はばたけ地域創生士! サミット開催に向けて」

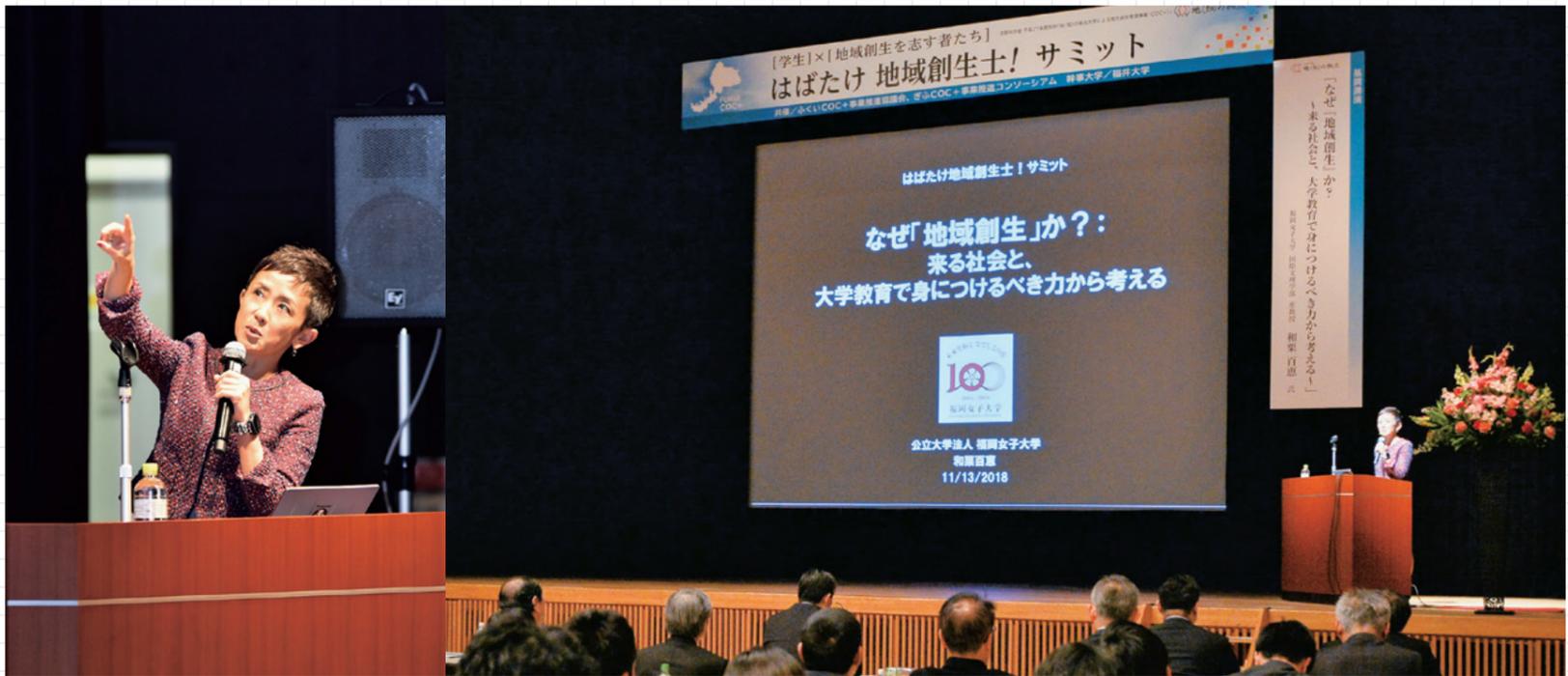
て交流・融合し、切磋琢磨することで、新たな化学変化が生まれ、地域創生士の進化・深化につながる。さらに各地のCOC+事業が協働して水平展開する取組みを全国に発信して連携を呼びかけ、行動を開始できないかと考え、今回のサミット開催となりました。
COC+事業が本来目指すところは、地域ひいては国、世界、地球の持続的発展を可能にするための次世代を担う人づくりとその場の創成です。それには腰を据え、努力を我慢強く継続することが必要です。COC+は「センター・オブ・コミュニケーション」の略称ですが、この事業を通して私たちが取り組まないといけないのは「チャレンジ・オブ・コラボレーション」「チェンジ・オブ・コラボレーション」ではないかと思っています。

基調講演

なぜ「地域創生」か？

「来る社会と、大学教育で身につけるべき力から考える」

福岡女子大学 国際文理学部 准教授 和栗百恵氏



無力さを悟る時から 学びは始まる

今日この会場にいる皆さんがやられていることは地域創生の旗のもと、来る社会を生きて、来る社会を作るために今後さらに必要とされる力を、地域創生の文脈の中で育てているのではないかと思います。

義務教育の延長線上で大学という場所が変化し、大学の学校化、学生の生徒化とも言われていますが、魂を込めたCOC+事業の多くは「学生たちが体験を通して世界(自分自身、他者、社会)と出会い直して、関わり合っていくこと」をやられているのではないのでしょうか。

そのプロセスのなかで、学生たちは「自分は何をしたいのだろう」「何を指すのだろう」と自問する機会が増えると思います。そして、いろんな場所に行っ

てみて自分の無力さを悟ることから、学生たちの学びが始まるのかも知れません。

今の学生たちは「お腹空いた」という前に、いろんな機会が目の前に提供されています。ある意味、COC+事業もそうでしょう。与え過ぎないように、うまく抜いていくことも必要です。学生は地域の現場で「役に立たない自分があるんだ」と分かった瞬間、自分がやらなくてはならないことは何なのか。他者や社会から求められていることは何なのかを考える。COC+事業とはまさにその場を提供しているのだと思います。

リフレクションを大切に

リフレクション(振り返り)はこの何年かで市民権を得た言葉



てくるでしょう。しかし2025年、あるいは消滅可能性都市の2040年は急に起こるわけではなく、変化は現在進行形で、今もそこに向けて動いています。欧米、特にヨーロッパの人たちと話していると、「VUCA」というキーワードがよく出てきます。今度出る「OECDHデューケーション2030」という報告書の中でも、このVUCAが登場します。

VUCAとは現代を表す「Volatility(不確実性)・Uncertainty(不確実性)・Complexity(複雑性)・Ambiguity(曖昧性)」。私たちは今、そういう世界に生きています。

IPCCは特別報告書「1.5℃の地球温暖化」を発表しました。そこには地球全体の気温が1.5℃上がると、どんな影響があるかということが書かれています。そのことと私たちが、ゆえに誤用が多い言葉です。学生たちに「振り返りしよう」というと、「○○しました」「○○が分かりました」「貴重な経験ができました」と、なりがちですが、リフレクションとは本来、そうではありません。私自身、これまで体系的に学んだ中で、リフレクションを大切にしている、行き着いた結論がこれです。「リフレクションとは、他者や他者とともに社会に働きかける行動を通して、自分自身の価値観や認識枠組みに気づき、また、それらがどのような規範や社会構造に根付くかを客観視して、その枠組みの外を考えてみる」とことだと考えています。

私たちは自然と物事を見る自分のメガネを持っています。そのメガネを外すと、物の見え方は違いますし、色がついたレンズなら色がついて見えます。それ

ちは無縁でいられない。もちろん、地域創生も無縁でいられません。

グローバル経済が新興国を台頭させ、人工知能によって仕事が変わり続ける中で、社会はどんどん変わっていきます。私たちは私たちがまだ知らない職業が生まれてくる未来に向けて、他者や社会のためにリーダーシップを発揮し、グローバルな使命を果たす学生たちを育てなければいけないミッションを担っています。

グローバルはグローバル ローカルはグローバル

これから事例発表で大学の学生が自分たちの経験についてお話ししてくれますが、もしかすると中には「グローバルな使命と言われたって……」と思っている学生もいるかもしれません。私が福岡で地域のことを学ぶ学生たちにグローバルな話をすると、「ローカルなことをやっている」。

が認識の枠組みです。その認識の枠組みはそれぞれの社会であったり、文化、規範、習慣、社会構造に根ざしています。そこに気づくことで、初めて考えることができます。認識の枠組みを再認識しないことには、リフレクションになり得ないと思っています。

あえて失敗させる スタンスも必要

COC+事業には、熱い思いを持ち、面倒臭いことを厭わずにやる大人たちが集っています。そんな大人たちが学生と関わる時、「はい、プロジェクトができました」ではなくて、学生たちに失敗してもらおう、致命傷にならない程度にコケてもらおう、コケて傷を洗ってごうやうやう、コケて傷を洗ってごうやうやう、傷を治すかを学んでもらう。そういうスタンスが必要なのではないかと思っています。

「ふくい地域創生士」のパンフレットに、「選択する、意志を持って。」というキャッチコピーが記されています。意志はどの程度まで発揮できるのでしょうか。自分に問う。自分はなぜ生きているのかを問う。そこから意志は生まれます。軸となる自分を作ら

るから「グローバルとは必ずしもつながっていない」「グローバルじゃなくて、地域創生だし」「グローバルと言っても地元就職するなら関係ないんじゃない」「といった反応が返ってきます。なかなか繋がらない、というのが実感です。「グローバルはローカルであって、ローカルはグローバルだ」という言葉は色々な場で使われますが、変化が激しく予想もできない社会において、そこで波に飲まれるのではなく、自分が社会を構成しているんだと認識を持ちながら課題を発見し、解決していく。そういった能力がローカルでもグローバルにおいても求められています。地域創生だからといって足元の地域のことだけでなく、ローカルとグローバルは常に繋がっていることを意識する必要があります。



ないまま消費するかのよう。「次はこのプログラム」とならぬようにしていくことが大切です。

地域創生を自由に創造

今日のお話の最後に伝えたいのが「地域創生の中で学び、地域創生のために学ぶ」という言葉です。熱い気持ちを持った大人が集まるCOC+事業で、学生たちに地域創生とは何かを考えてもらおう。そして今から10年後、私たちが知らない仕事が出てくる未来に向けて、地域創生を自由に創造的にアプローチできたいのではないかと思います。

「あきた創生推進士」



「復して発行すること、名付けて『復活ニュースレタープロジェクト』です。ニュースレターのターゲットはお客様、生産者等の取引先、地域の方で、ターゲットの方やお店との交流を深めることを目的としています。」

「地元の温かさを感じてもらうように」

この紅玉新聞の刊行にあたり、大切にしたいことは3つあります。1つ目は「生産者の方々の熱い想いが伝わる文章を書くこと」、2つ目は「十文字に住んでいない私たちの目線を大切にすること」、3つ目は「情報の発信のみではなく、アンケートやお客様の声などお客様の意見があっただけでなく、成立するようなコンテンツを考えること」です。

「デリカテッセン&カフェテリア紅玉」の利用者は秋田県にお住まいの方が大半なので、その

「COC+キャリア認証プログラム」は、秋田大学教育文化学部地域文化学科の教育プログラムを核にして、一定の地域志向科目を修得した学生に「あきた創生推進士」の称号を授与するものである。地域志向科目の学習により、秋田県の現状や課題を理解するとともに、修得した専門的知識や技能の活用により、地域課題解決のために主体的に行動できる人材の育成を目指す。

「COC+キャリア認証プログラム」は秋田大学単独の認証制度として平成29年4月からスタートしています。プログラムを構成する地域志向科目は現在、全学共通の教養科目28科目、各学部の専門科目93科目を指定しています。教養科目の地域志向科目によって秋田を知る、秋田を体験することからスタートし、専門科目により地域課題解決に必要な専門知識や技能の修得、地域の人々との協働による地域課題の発見や解決のための実践活動を経て、「あきた創生推進士」として認証するプログラムとなっています。平成30年3月に第1期生95名に称号を授与。学位授与に先立ち、就職活動に必要な場合は「修了（見込み）証明書」を発行します。

今後の展開としては、地域志向科目の更なる拡充を進めていきます。教養科目において「秋田の産業」「秋田のくらし」など合計9科目を31年度から新たに開講する予定です。さらに現在、理工学部の創造生産工学コースにおいて、県内企業が提供する研究課題について学生のプロジェクトチームが実践的に課題解決に取り組む産学連携教育プログラムを必修としておりますが、来年度は他コースにおいても実施できるように準備を進めています。

【学生発表】
実習先と協働して課題や解決策を見出す
 COC+キャリア認証プログラムを代表する地域連携プロジェクトゼミは教育文化学部地域文化学科のコア科目で、3年次の選択必修科目です。実習先の社員や職員と協働する実務体験を通して、課題や資源を発見し、解決策や活用方法を見出すことにより、実践力を身につけます。平成29年度は43名の学生が17の実習先に分かれ、それぞれのプロジェクトに取り組みました。私たちが実習で伺ったのは「有会社たかえん」です。横手市十文字町にある会社で、「デリカテッセン&カフェテリア紅玉」という地産地消をテーマにしたテイクアウトのできる総菜屋さんです。今回のゼミでの目的は休刊中の「ニュースレター」紅玉新聞を復刊させ、かつ継続

人たちが自身の地元の温かさを感じてもらうことが最優先だと考えました。地元の人々の食文化に誇りを持つことで、県外から来る人も秋田の特色を受信することができ、さらにお客様に寄り添ったものになり得ます。



継続発信するための仕組み作りにも着手

また、今後も紅玉新聞の発行を続けていけるように、新聞の仕組み作りにも着手しました。お客様の声を聞いたり、アンケートの実施を継続してもらうこと、さらに新聞の構成をある程度パターン化しつつ、発行の時期に応じて柔軟に内容を変えられる部分も作る予定です。特に後者は記事の内容を一から考

える負担の軽減とマンネリ化防止が期待できます。また、紅玉の食事は無添加・県産食材の使用にこだわっているため、地元旬の食材の魅力はもちろんな、季節ごとの人気メニューなどお客様の意見を受け入れつつ発信できるものが多くあります。

実習を通して得た気付き

この実習全体を通して気が付いたことが沢山ありました。まず生産者の方から、人の喜ぶ姿に元気をもらっているというお話を聞いて、「誰かに喜んでほしい」という気持ちが仕事の

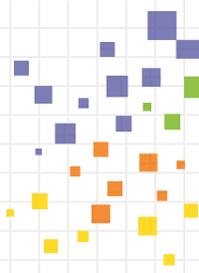
原動力になるのだと感じました。そして生産者の方々から直接熱い想いをお聞きしたことで、それを読者の方々にも伝えたいという思いが強くなりました。そのために現場を自分で見たり、聞いたりすることの大切さを知りました。

この実習を経て地域の農業やそれを支える仕事に関心を持ち、実際に就職活動でもその経験を生かすことができました。今後は仕事を通して生産者と消費者を結び役割を果たし、地域や農業を元気にしていきたいと思っています。



発表者
 ●秋田大学 特任准教授 地域創生推進役
 COC+推進コーディネーター 高橋 訓之
 ●秋田大学 教育文化学部 地域文化学科 4年 神戸 真結
 ●秋田大学 教育文化学部 地域文化学科 4年 齊藤 梨佳

「ぎふ次世代地域リーダー」



岐阜大学の「次世代地域リーダー育成プログラム」では「地域（岐阜）を知り」「地域（岐阜）の課題を見つけ」「地域（岐阜）の課題解決に向けて行動する」「能力を備えたグローバルな人材を育成することを目指している。このプログラムは、入学生全員が地域志向科目の2単位を必修とするなど、全学的な地域志向教育の基盤となるものである。

発表者

●岐阜大学 地域協学センター准教授 大宮 康一
●岐阜大学 工学部 社会基盤工学科 4年 加藤 大暉



「次世代地域リーダー育成プログラム」は、「地域リーダーコース」と「産業リーダーコース」の2コースを備え、平成27年度以降の入学生全員を対象に展開しています。初級段階には、地域志向科目群・地域活動科目群（地域ボランティア）・地域実践科目群（地域インターンシップ）があり、地域で専門的能力を実践的に応用して活動するための基礎的な素養や能力を身に付けることを目指します。所定の8単位以上を修得し、その後さらに実践的な学びをしたという志のある学生が、地域協学センターでプログラム登録を行い、上級段階の修了を目指すことが出来る教育プログラムです。本日発表する学生が取り組んだ上級段階科目の「地域リーダー実践（上級）」では、実際の地域の課題解決等に向けて実践的に取り組むこ

とで、地域の中でリーダーシップを発揮できる人材、あるいはリーダーを支援する人材として必要な素養や能力を養います。このプログラムを修了すると、「学生コーディネーター」の称号が授与されます。さらに、プログラム修了者で、地域協学センターと協働活動を行い、一定の実績を上げた者には「ぎふ次世代地域リーダー」の称号を授与しています。レポートの提出、実際の面談を経て、しっかりと認定をした上で、この称号授与となっています。協働活動では、経験を活かした後輩指導（グループワークでの助言や企画へのアドバイス等）で自分自身の理解も深めたり、地域協学センター主催・共催行事の運営補助などを通して、地域連携の現場での実務経験を積んだりしています。学生がプロジェクトを立ち上げることもあり、これらの活動が称号授与への大事なステップとなります。

【学生発表】

子育て世代の移住促進に取り組む

私たちが赴いた地域は、岐阜県中津川市阿木地区です。まず、阿木に関することや課題、魅力などを現地調査から情報収集し、現状として少子高齢化が進むことや若者や子育て世代が必要といった問題が見つかりました。そこでテーマとして子育て世代に移住してもらうための取り組みに決定しました。続いて複数回現地調査を行い、地域住民の方や実際に阿木に移住した方などにヒアリング調査などを行い、その結果、見つけたのが次の3つの課題でした。

調査で見つかった3つの課題

課題1は、「子育て世代」の定義があいまいではないか、とい



とです。阿木が移住者に求めているものとして地域活動への積極的な参加があったのに対し、移住者が移住先に求めているものは、阿木が自分の求めるものを与えてくれるかどうか、でした。この点から阿木の地域住民と移住者には考え方にズレがあることが分かりました。課題3は、なぜ阿木から人が出ていくのかという理由ですが、阿木に住むデメリットがメリットを上回ってしまった。阿木に住むメリットを高めるためには都会で得られるものとは別の土俵で勝負する必要がある、たとえば学校と地域の連携、手厚い子育て支援が必要であると考えました。

子育て夫婦に向け移住促進パンフ作成

こうした課題を踏まえ、活動の企画案をメンバーで考えました。PR動画や移住ツアー、パンフレットの案が出ましたが、分担作業が可能で、学生の技術でも作成可能な移住促進パンフレットの作成に決定しました。パンフレットのコンセプトは、阿木の良さが「子育てのしやす

活動を通して多くのことを学ぶ

さ」であり、阿木が求める移住者像が子育て世代であることから、「若い夫婦の移住促進」にしました。パンフレットの作成にあたっては「子育て・移住に関する情報」「女性が手に取りやすいデザイン」などを工夫しています。完成したパンフレットの主な配布先は中津川市役所、中津川市役所ホームページ、岐阜県庁、東京・大阪にある移住相談所などです。

活動を通して、メンバーからこんな意見が出ました。良かった点として「良いパンフレットにするために試行錯誤できたこと」「阿木という地域について詳しく知ることが関わることができた」などがあり、悪かった点としては「報告・連絡・相談ができていなかった時があったこと」「巻き込んだ住民が一部であり、住民全体の意識を変えたかどうかは分からないこと」などが挙げられました。また、活動を通して学んだことは、「各個人の役割と指示を明確にすることの大切さ」「地域の課題について考えることの難



しさとやりがい」などです。計画の重要さやヒヤリング、パンフレット作成の知識などは就職活動や卒業研究の時などに必要な能力になっているのではないかと感じています。子育て世代を呼び込む移住促進パンフレットの制作を通して子育て世代の移住に対する新しい取り組みの提案ができたこと、移住に対する考え方のズレなど新しい問題点の発見ができたこと、このように阿木の抱える移住問題に対して、わずかながら力になったのではないかと感じています。

うことです。私たちは子育て世代として「将来子どもを持つ予定の夫婦」「幼い子どもがいる夫婦」「中高生の子どもがいる夫婦」の3つのパターンを想定し、それに合わせてターゲット特有

の不安やニーズに対応した移住政策が大切なのではないかと考えました。課題2では、阿木が求める移住者と、移住者が考える移住にズレがあるのではないかというこ

「子ども発達支援士」



座学だけでは得られないものを学ぶ

活動を通じて学んだことは、自閉傾向のある子どもとの接し方、関係づくりには時間がかかること、発達障害など名前がついた障害があっても、健常児と変わらないことが多くあるため、必要以上に構える必要はないということです。

実習を通して障害のある子どもへの偏見がなくなり、障害のある子ども・障害のない子どもにも分け隔てなく接することができるようになりました。また、「待つ」ことの重要性が分かり、「待つ」ことを実践できるようにもなりました。

「子ども発達支援士」のプログラムに参加して座学だけでは絶対に得られないものがあることが分かりました。障害のある子どもたちと接するまでは自分でも気付いていなかった思い込みにも気付くことができました。将来、教師として子どもたちと接することになった時、発達障害のある子どものニーズに合った教育ができるよう、学んだことを活かしていきたいと思っています。

「子ども発達支援士」の資格を取って、子どもの見方・考えの理解の仕方が変わったと思います。大学に入ったころは、ただ「子どもが可愛いから子どもに関わる職に就きたい」「幼稚園教諭の免許を取るだけがいい」と思っていました。子ども発達支援士の学びを通して、発達に困りのある子どもや保護者を支えていきたいと思うようになりました。そして子どもを成長をより実感できているように思います。



「子ども発達支援士」は幼児教育の専門職業人を目指す学生の専門性を向上させることにより、発達障害のある幼児がニーズに合った支援を幼稚園や保育所で受けられることを目的としている。幼稚園や保育所、小学校などに関する免許・資格を有する人や、目指す学生が対象である。

- 発表者
 - 佐賀大学教育学部 附属教育実践総合センター 准教授 石井 宏祐
 - 佐賀大学教育学部 学校教育課程幼小連携教育コース 特別支援教育専攻 2年 淵上 真実
 - 佐賀大学 文化教育学部 卒業生(保育教諭) 尾辻 千香

「子ども発達支援士」の背景には発達障害やその可能性のある幼児をほとんどの幼稚園などで受け入れている状況があります。佐賀県内を対象にした調査によると、約70%の保育者が発達障害の可能性のある幼児の担任をし、約90%が対応に難しさを感じています。子ども発達支援士養成プログラムで核となるのが、1年次に開講される必修科目「子どもの支援」です。この科目は前期と後期に1日ずつ実施する集中講義に加え、30時間の施設実習への参加を課しています。県内19の学内外施設と連携し、学生それぞれが行きたい場所を選択して行えるようになっています。また、前期と後期の集中講義において、地元の関連施設に就職した有資格者を講師として迎えることにより、資格の取得や関連施設への就職に向けて、学生の更なる意欲向上に成果が得られる

ました。「子ども発達支援士」の資格認定者数は平成29年度までに623名を数えています。有資格者のうち、資格を生かせる職場に入職した割合が80%、そのうち64%が佐賀県内に就職しています。平成25年度に制度がスタートし、すでに「子ども発達支援士」の方々が地域で活躍していますので、今日のサミットに参加した5大学では特殊かもしれません。そうした特殊性を生かして今回は、「子ども発達支援士」を目指している学生、「子ども発達支援士」として地域で活躍している保育教諭の方に事例発表してもらったことになっています。今後の課題として、卒業プログラムへの参加、子ども発達支援士交流会を発売にし、また、単位互換制度によってさまざまな連携校の学生の交流を深めていけたらと考えています。

「子ども発達支援士」の資格取得のために行ったことは大きく分けて、基礎知識の獲得と実習です。基礎知識の獲得では前期と後期に1回ずつ行う集中講義で実際に障害のある子どもと接している人、子ども発達支援士のプログラムを修了した方のお話を聞き、知識を得ました。実習の内容は、自閉症の子どもと一緒に工作をしたり、心理リハビリテーションへの参加、佐賀県療育支援センターでの余暇支援、自閉症の児童、そのきょうだい児と遊ぶなどです。自閉症の児童との遊びでは、やりたいうことを、時間をかけて行うために子どもとの距離が縮まり、継続的に対象児童と関わることで良い関係づくりもできました。



【保育教諭発表】 資格取得で子どもを理解

子ども発達支援士の学びで、今の自分で

びがあったからこそ、今の自分があると思うし、困りのある子どもを支えたいと思うようになりました。「子ども発達支援士」の名前に恥じぬように子どもたちの未来をサポートして、一生懸命働いていきたいと思っています。

「未来の地域リーダー」



初めて参加した活動では富山の優良企業を就活生に紹介し、富山で就職してもらうことを目標に、企業紹介冊子を作成しました。企業5社を訪問し、訪問した中でお客様のニーズに合わせることで市場を拡大しているこ

とや、文系理系を問わず学生を採用しようと務めていること、必要なスキルを企業に入ってから備えることができる仕組みが整っていることなどを知り、大変驚かされました。

富山大学の「地域課題解決型人材育成プログラム」では全学生の50%以上を「未来の地域リーダー」として育成している。「地域志向科目群」「地域課題解決科目群」「地域関連科目群」から4科目8単位以上履修した学生に「地域課題解決型人材育成プログラム修了証書」を授与し、地方創生に結びつく「未来の地域リーダー」の称号を付与する。

富山大学COC+事業では、教育戦略の重点として行っているのが「未来の地域リーダー」育成です。COC+関連科目はスタート段階では52科目、100単位でしたが、平成29年度には155科目、316単位にまで増やしています。

平成28年度の後学期に「富山学」「産業観光学」「地域ライフプラン」の地域系3科目を新設、さらに平成30年度より、それぞれの学生の特性に合わせて、「富山の地域づくり」や「富山のものづくり」概論を加えて5科目に増やしました。履修率は当初、200名でしたが、平成30年度には920名まで増やしています。

授業は実際に地域就職に効果があったのか、統計分析を行っています。

また、学生の企業選択の因子分析を行いました。さらに企業が大学に求める強化ポイントを県内企業にアンケート調査しています。

こうした調査を踏まえ、「未来の地域リーダー塾」では地域課題解決型人材としての知識や能力を育て、地域で活躍するためにさまざまな課題や就職活動に主体的に取り組んでいきます。座学ではなく、授業以外で地域と接する場を作ることを目的に、3大学が合同して富山の山村での地域課題解決合宿「とやま塾(TOGA 2017)」なども開催しました。

さらに富山大学だけではなく、オール富山COC+として県内の7つの高等教育機関で未来の地域リーダーを育成できるように、人材育成ビジョン検討ワーキンググループを作って規則制定を進め、平成31年度から順次各高等教育機関が地域リーダーを輩出する予定です。

イベントに参加し多くの提言を行う

3年生の夏にはSCOT SU MMR SEASON」というイベントに参加しました。2週間ほど南砺市利賀村に宿泊し、来年度にロシアのサンクトペテルブルクと日本の富山県南砺市利賀村・黒部市で開催されるシアター・オリンピックのPRを行いました。8月には魚津市の「UO'sプロジェクト」で、お祭りを通して地域交流を盛んにすることを提言させて頂きました。地域課題を学生自らが発見するということや空き家対策や学校教育、子ども食堂などさまざまな課題解決の案が出て、どの



【学生発表】
企業紹介冊子作成し企業の一端を知る

富山の地域活動に積極的に参加するようになった大きなきっかけは2年生の前期に受講した「地域ライフプラン」という講義です。「地域ライフプラン」では自治体の方から課題や現状を聞き、質疑応答を、繰り返すことで、「富山の魅力を高める活動に参加したい」と思い始めました。



課題に沿って対応策を考えるかということが大変難しいところでした。私が属していた地域交流チームではお祭りを開催するのが難しくなった地区で合同でお祭りを行うことにより、お祭りを継承し、地域の輪を広げていくことができるのではないかと提言しました。

地域が大好きになった2泊3日の合同合宿

2泊3日の富山大学、富山県立大学、富山国際大学による合同合宿「とやま塾 TOGA 2017」では陶芸体験やたら汁、ひすい探し、ばたば茶、塩作

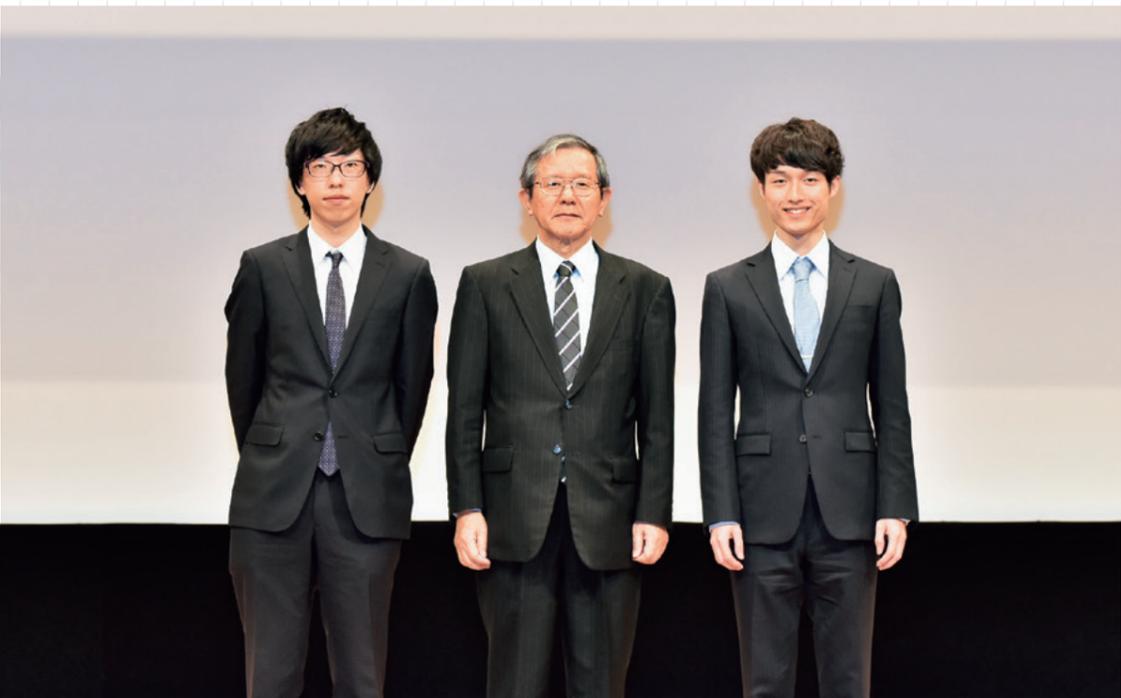


りを体験し、1日で朝日町のことが大好きになりました。3日目には朝日町バスについてプレゼンを行いました。スポーツを活用して朝日バスを利用することやショッピングセンター・病院を経由するルートにするなど、お客様が利用しやすいのではないかと提言しました。

これらの体験を通して企業の方、地元の方、公務員の方、他大学の方と出会うことができました。そして地域の魅力を知り、より多くの方に発信していくことがとても楽しく、有意義な時間であることをこの場を借りてお伝えできれば、大変うれしく思います。

発表者
●富山大学 地域連携戦略室 特命准教授
COC+統括コーディネーター 尾山 誠
●富山大学
経済学部 経営法学科 3年 米田 小桃

「ふくい地域創生士」



福井県では県内5つの4年制大学が県や産業界と一体になって、地域の持続的な発展とイノベーションを推進する担い手を育成している。人材育成に際し、学生の主体的な学びを引き出すとともに、学生の学修と今後の展開力を保証するため認定制度「ふくい地域創生士」を設定している。

発表者

- 福井大学 参与
COC+推進コーディネーター 舟木 幸雄
- 福井大学 工学部 知能システム工学科 4年 関口 光樹
- 福井大学 教育地域科学部 地域科学課程 4年 石丸 汰良

【学生発表①】

県内企業に就職を決めた理由

私は来年から福井県内の企業に就職します。私が就職先を県内企業に決めた理由は2つあります。まず1つ目は興味のある仕事を福井県内で見つけることができたからです。就職活動を始めた当初は県内企業のことあまり知らず、県外就職も考えていました。しかし企業研究を進めていくうちに県内にはさまざまなジャンルのたくさんの方があることを知り、魅力のあ



地域を学び、自分を知ることにより「地域に貢献できる人材」と認定された証として、平成30年2月に「ふくい地域創生士」第1期生50名が連携5大学から認定されました。各大学において定める、地域志向科目12単位以上を修得することに加え、地域でのインターンシップまたはこれに類する活動に参加することで申請要件を満たします。さらに、学生は各大学で申請する際に、「地域志向科目の修得やインターンシップ等の経験を通過して自ら行動したこと」「地域(福井やあなたの出身地域)の課題を解決するためにどのようなアクションを行ったか、又はこれから何をしたいか」を宣言し、各大学の推薦及びふくいCOC+教育プログラム開発委員会の承認を経て「ふくい地域創生士」として認定することとなります。平成30年度からは、「ふくい地域創生士」

として認定された学生の中から、地域課題を解決する提案力や、より専門性を高める学びを通して、自ら課題を発見し、それへの対処・アイデアの提案ができる能力を身につけた学生を、新たに「地域創生アワード」として表彰していく予定です。ふくいCOC+では、認定されるのがゴールではなく、認定された学生がその後、社会に出た時にどのように活躍できるかが重要であるという思いから、第1期生の認定後に地元産業界等とともにフォーアアップ研修、意見交換会、自身の取組を発表する場の設定など、幅広く機会を設けてオール福井で応援し続けています。

る会社をいくつも見つけることができました。そのなかでIT業界に一番興味が湧き、IT企業に進むことに決めました。2つ目の理由は、働きやすい環境が地元就職にはあると感じたからです。社会人は仕事をすることにあって学生とは違い、大きな責任を伴います。よって仕事に慣れるまでは心身ともに不安定な状態になると考えました。しかし地元就職ならば近くに家族や友人がいるので、実家に帰って話を聞いてもらったり、友人と遊んだりすることで仕事の不安やストレスを少しでも和らげることができます。

情報不足が人口流出の一因

就職活動を終えて感じたことがあります。それは福井県で現在大きな問題になっている人口流出の原因の1つが福井県の企業についての情報不足ではないかということです。特に県外大学に進学した学生は県外企業に目が移り、地元企業に関してはあまり関心がないように感じました。そのため地元企業の企業研究をあまりせず、地元企業の魅力をあまり知らないまま、県外企業に就職する方も多いのではないかと思います。このようなことを防ぐには福井県内の企

業についても深く知ってもらう必要があると思います。「ふくい地域創生士」になったら、福井の魅力や現状をいろんな人に発信することが私たちのやるべきことだと感じています。

【学生発表②】

アメリカで福井の情報を発信

私は大学2年の時、外務省主催「KAKEHASHI Project」に参加し、アメリカに行きました。これは単純に海外に行って語学力の向上を目指すものではなく、現地の方、主に学生に対して日本や選ばれた都道府県特有の制度について紹介し、交流を



図ろつというものです。

私が行ったのはインディアナ州とオハイオ州で、現地の中学校とか高校・大学・カルチャーセンターなどを訪問しました。そこでアメリカではあまりなじみがないであろう学校給食について紹介しました。この交流の後、実際に福井に遊びに来られた方もいます。外に情報を発信し、人を福井に呼び込むという大きな意味での経験はできたのではないかと思います。

ふくい地域創生士を情報発信の材料に

私は「ふくい地域創生士」という資格を、外に向けて福井の情報を発信していくための一つ

の材料になると考えています。そして、この資格が「地域に貢献できる人材」の証明であることを知ってもらうことが必要です。そのためには、存在自体を周知させる必要があると思います。この制度ができてから1年しか経っていませんから、一般の方はどういふものなのか知るにはまだ時間がかかるかもしれませんが、新たに資格を取得する第2期生からすると、「これは実際なんのために取ったのか。何に役に立ったのか」、企業側からは「この資格を持つ学生は何かできるのか」というモヤモヤもあるかもしれません。お互いが一つのツールとして認識し、よりよく活用することができればいいのではないかと私は考えています。



「未来に向けたCOC+」



和栗 百恵 氏
福岡女子大学 国際文理学部 准教授



峠岡 伸行 氏
福井県経営者協会 専務理事



岩井 善郎
福井大学 理事
(研究・産学・社会連携担当)・副学長



益川 浩一
岐阜大学 地域協学センター長 シニア教授



舟木 幸雄
福井大学 参与 COC+推進コーディネーター



和栗 同時に「子どもの就職はやはり大企業に」「大都市で就職させたい」などと、ますます過干渉になっている保護者の皆さんの意識も変える必要があると思いますね。

峠岡 インターンシップ時の企業での体験が自分の将来に向けて、たとえば「働く」とか「自分の将来の専攻」といったものにつなげるためには大学内で噛み砕いて一人一人と対話しながら、「次はこんな目標に向かって頑張ろう」と声をかけていくプログラムをぜひやって頂きたいと思っています。

益川 インターンシップで若手社員を育てる」と位置づける企業が増えてきましたね。学生がインターンシップに行く、メンターの役割として若手社員をつけてくれるのもその一です。

峠岡 3・4年目ぐらいの先輩社員が受け入れプログラムに参加して、学生に教えていく。学生と若手社員が一緒になって勉強していく。福井県の事例です

益川 岐阜大学の例を出しますと、初級段階・上級段階に分けてプログラムを作っています。ある意味、初級段階のところはこちらでお膳立てをして、取り組みを進める。これはお節介かもしれないけれど、今のおとなしい学生にはお節介味にやる



舟木 和栗先生が講演で「未来の年表の話をしました。あの年表にしたのは我々、大人な人もありません。若井先生がサミットの冒頭、「COC+はチャレンジ・オブ・コラボレーション」と言いましたが、大人も学生もまさにそういう時代に入っているのかなと感じています。本日はありがとうございました。

益川 岐阜大学では保護者も含めて大学のことを分かってもらう、あるいは地元のことを知って頂く機会が必要だということ、高校生とその保護者を対象にした高大連携のフェアを行っています。

若手育成の場
インターンシップが

舟木 ふくいCOC+事業では、学生が企業を知らないのは企業の方も発信していないのではなにかということ、昨年からは福井型「新採用学」研究会を始めました。企業では研修体制をしっかりと整えないと学生が就職しないということが分かってきたためです。そういう面では、企業の意識も少しずつ変わり始めている。

和栗 その一方で、大きく変化していく未来を求められる力、誰かに用意してもらわなくても自分で門を叩き、取りに行く力だと思っています。もちろん、大学としてプログラムを準備しないといけない、学生に機会も与えなきゃいけない。そんな中、どうやって自ら取りに行く力を育てるか。学生たちと与え過ぎず、渴望感を作り出すことも必要です。

益川 岐阜大学の例を出しますと、初級段階・上級段階に分けてプログラムを作っています。ある意味、初級段階のところはこちらでお膳立てをして、取り組みを進める。これはお節介かもしれないけれど、今のおとなしい学生にはお節介味にやる

COC+はリベラルアーツ
地方大学の教育の核に

舟木 COC+事業は今後どうしていくべきだと思いますか。

岩井 COC+事業でやっている地域志向教育はリベラルアーツだと考えています。地域には昔の偉人の遺跡やお墓、生誕の地など、いっぱいあります。それに触れた時に、どこまで関心を持って取り組むか。辛普森式

和栗 最初に事例発表についてご感想をお聞きしたいと思えます。

峠岡 それぞれの大学の発表を聞いて、地域ごとにいろんな工夫をされてプログラムを組まれていることがよく分かりました。その一方で、資格は取って終わりではありません。むしろ取ってからが大事です。地域の情報を発信するのが地域創生士に求められた役割ではなく、「地域創生士になったらこんな活躍ができるんだよ」と、さまざまなステージで活躍する姿を見せ、後輩たちへのロールモデルになることが地域創生士に期待されていることだと思います。

益川 大学側では教育プログラムを実施する上で、育成すべき人材像を策定して能力を見える化し、評価することをしていいますが、そこにはなかなか表れにくい実感のこもった声が今回の事例発表で聞け、学びの成果を見ることができました。

和栗 私は厳しめのキャラで通っていますので、あえて言わせて下さい。さまざまな経験をして「楽しかった」「うれしかった」

益川 COC+事業について各大学はインターンシップを核としたプログラムを作られていると思います。ただし、インターンシップで学生を外に出すだけでは、「教育の外注化」です。インターンシップをした学生たちがその体験をしっかりとリフレクションして一般化、概念化した上で、トライアルさせる。こ

舟木 最初に事例発表についてご感想をお聞きしたいと思えます。

峠岡 それぞれの大学の発表を聞いて、地域ごとにいろんな工夫をされてプログラムを組まれていることがよく分かりました。その一方で、資格は取って終わりではありません。むしろ取ってからが大事です。地域の情報を発信するのが地域創生士に求められた役割ではなく、「地域創生士になったらこんな活躍ができるんだよ」と、さまざまなステージで活躍する姿を見せ、後輩たちへのロールモデルになることが地域創生士に期待されていることだと思います。

益川 大学側では教育プログラムを実施する上で、育成すべき人材像を策定して能力を見える化し、評価することをしていいますが、そこにはなかなか表れにくい実感のこもった声が今回の事例発表で聞け、学びの成果を見ることができました。

和栗 私は厳しめのキャラで通っていますので、あえて言わせて下さい。さまざまな経験をして「楽しかった」「うれしかった」

舟木 COC+事業によって、大学の意識は変化していると思いますか。

益川 COC+事業について各大学はインターンシップを核としたプログラムを作られていると思います。ただし、インターンシップで学生を外に出すだけでは、「教育の外注化」です。インターンシップをした学生たちがその体験をしっかりとリフレクションして一般化、概念化した上で、トライアルさせる。こ

資格は取って
終わりではなく

取ってからが大切

舟木 最初に事例発表についてご感想をお聞きしたいと思えます。

峠岡 それぞれの大学の発表を聞いて、地域ごとにいろんな工夫をされてプログラムを組まれていることがよく分かりました。その一方で、資格は取って終わりではありません。むしろ取ってからが大事です。地域の情報を発信するのが地域創生士に求められた役割ではなく、「地域創生士になったらこんな活躍ができるんだよ」と、さまざまなステージで活躍する姿を見せ、後輩たちへのロールモデルになることが地域創生士に期待されていることだと思います。

益川 大学側では教育プログラムを実施する上で、育成すべき人材像を策定して能力を見える化し、評価することをしていいますが、そこにはなかなか表れにくい実感のこもった声が今回の事例発表で聞け、学びの成果を見ることができました。

和栗 私は厳しめのキャラで通っていますので、あえて言わせて下さい。さまざまな経験をして「楽しかった」「うれしかった」

リフレクションが
大学の役割

舟木 COC+事業によって、大学の意識は変化していると思いますか。

益川 COC+事業について各大学はインターンシップを核としたプログラムを作られていると思います。ただし、インターンシップで学生を外に出すだけでは、「教育の外注化」です。インターンシップをした学生たちがその体験をしっかりとリフレクションして一般化、概念化した上で、トライアルさせる。こ



まとめ

福井大学 理事(教育)学生担当・副学長 中田隆一



学生がCOO+事業に関わって、どういう力をつけたか、それをどうやって活かしていくか。これは明日のワークショップでも引き続き、主たる議題になると思います。

COO+事業はキャリア教育の一環です。従来のキャリア教育はどちらかというと、ある職業に就くために必要な知識・技能を修得させる職業教育の側面が強かったように思います。しかし、もはや、そういう時代ではありません。人生100年をきちんと見据えた上で、どんな生き方をしたいか。それを考えていく延長上に、職業選択がある

ります。

今日ではグローバルとローカルは繋がっています。私たちが生きていく上で、グローバルな課題は避けて通れません。また、急速に変化する社会に適応していくためには大学教育だけでなく、小中高教育、リカレント教育など、生涯にわたって学び続けることが必要です。そのなかで大学はどんな役割を果たしていくのか、私たちはよく考える必要があると思います。

今回のサミットでは学生を地域と関わらせることで、どう育てていくかを議論したいと考えました。会場にいる学生たちは自分が生きていく時代はどんな時代なのか、どんな環境になるのかをもっと知らないことには、何を勉強したらよいか分からないということが理解されたことでしょう。そういったことも踏まえて明日のワークショップではぜひ活発な議論をし、次への飛躍の礎にして頂きたいと思っております。

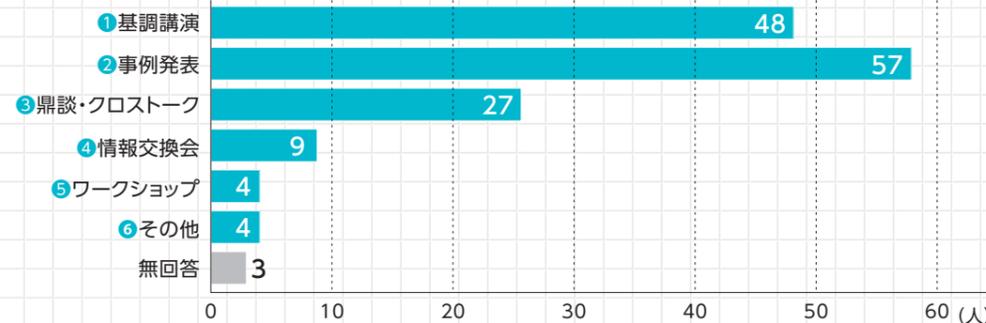
「はばたけ地域創生士！サミット」アンケート結果(一部)

○参加者数

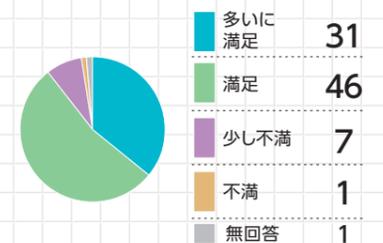
県内外の30大学や行政機関・企業を含む計52団体 約200人

○アンケート回収数 87部

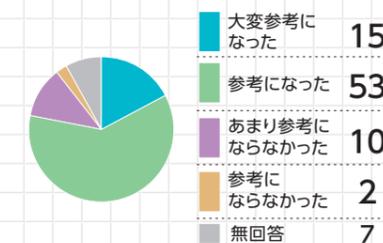
1. 何を期待して、今回のサミットに参加されましたか



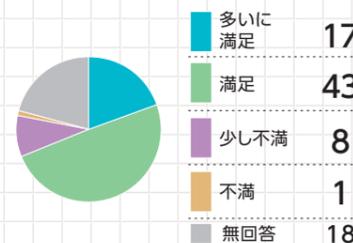
2. 基調講演について、どのように思われましたか



3. 事例発表について、どのように思われましたか



4. 鼎談・クロストークについて、どのように思われましたか



参加者の声(一部掲載)

- 他大学の事例や地域創生士の資格取得へのプロセスについて詳しく知ることができ、参考になりました。
- つつい事業の数値目標のみに気をとられがちですが、それよりこの事業が本来目指すべきものをもっと強く意識して将来を見つめた活動をしていけたらと思います。
- 学生の発表、先生の講演を聞き、地域を支える人材育成と世界中の社会情勢の変化なども合わせたグローバルという意識を高めていきたい。
- 様々な大学の取組みを短時間で知ることが出来て有り難かった。質疑の時間も有ると良かった。大学同士で学びあい高めあう機会が今後も続くと良いと思った。参加して良かった。
- 「地域創生士」という資格を持っているということよりも、「その活動の中で何を考えどう行動してきたのか」や「結果として今何を考え、今後どのように活かしたいか」というポイントの方が大切だと感じています。
- 基調講演の内容に感銘を受けました。先を見据えた目線を学生に得てもらいたいと思いました。
- 地域のことをプラス評価する姿勢を家族・教育関係者が各々子ども達に語り続ける必要があり、大学だけでなく取組が必要。

ワークショップ

1 実施概要

サミット初日は、基調講演と5大学の事例発表、「未来に向けたCOO+をテーマにしたクロストーク」が実施されました。

その内容を受け、2日目は、学生27名で6グループ、教職員35名で5グループと別れ総計62名により「それぞれの立場で考える地域創生の課題」、「これまでの経験を通して得た自身の変化」等について同じような立場で頑張っている学生または、教職員同士が交流しワークショップが実施されました。最後には、「今後自ら何を学び行動するか」等について全員が宣言★をして、今後に想いを繋げました。なお、このワークショップは岐阜大学地域協学センター大宮准教授、塚本助教のご協力のもとで実施されました。

★参加者全員の宣言を、一覧(P.22)にまとめました。

【交流の目的】

①学生同士の情報交流
学生同士で話すことで、前日に聞いた情報を再度理解し、自身の取組みや学びを相対的に捉え直す場とした。

②教職員等の情報交流
地域と連携した教育プログラムに携わる教職員や協力者が、お互いの取組みを学び合い、見習うとともに相互のネットワークを構築した。

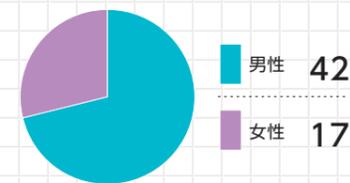


2 参加人数及びアンケート結果(一部)

アンケート結果(一部)

- 受付人数 62人
- 学生 25人
- 卒業生 2人
- 大学教職員 34人
- 企業関係者 1人
- アンケート回収数 59部

1. 性別



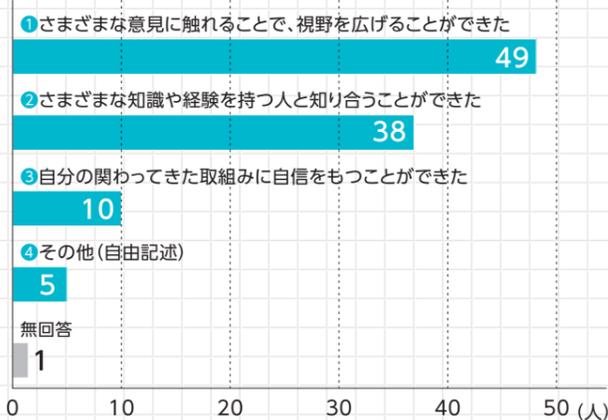
2. 年齢

- ① 10代: 1人
- ② 20代: 25人
- ③ 30代: 7人
- ④ 40代: 7人
- ⑤ 50代: 10人
- ⑥ 60歳以上: 9人

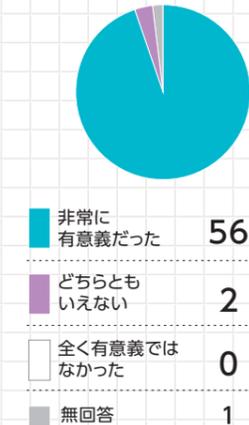
3. 所属

- ① 学生 25人
 - 2年生: 1人
 - 3年生: 8人
 - 4年生: 14人
 - M1: 1人
 - 学年未記入: 1人
- ② 教員 16人
- ③ 職員 13人
- ④ その他 5人
 - 事業推進コーディネーター
 - 事業CD
 - 会社員
 - 行政
 - 無回答各1人

4. このワークショップに参加して、あなたにどんな影響がありましたか(複数回答可)



5. 他大学の人の交流は有意義でしたか



参加者の声(一部掲載)

- 新しい経験を通して新しい価値を発見できることを他の方の話から再確認できた。(20代学生)
- 実際に想いを持った人に逢うことの大切さを知りました。ありがとうございました。(50代その他)
- この企画は継続し全国規模に発展させることが重要なことと思います。(60歳以上教員)

学生 1班

自分の居場所、自分の地域の資源や魅力をちゃんと伝えられる人になることです

【秋田大学】

今まで話したことがない人と話したり、体験したことがないことを体験していきたいと思っています

【仁愛大学】

いろんなことに興味を持って地域を、面白おかしくしていきたいと思っています

【富山大学】

地元の良い魅力や魅力を伝えていきたいと思っています

【福井工業大学】

さまざまなことに興味を持って人間になって、自分のなかにあるこだわりをなるべく捨てたいと思っています

【福井大学】

私は、できないと思うことをやってみる。やり続けること

【福岡女子大学・教員】

教職員 1班

地域と大学の意思疎通を深めたいと思っています。そのために行政と大学の架け橋になりたいと思っています

【福井県】

地域と自治体、企業の意思疎通を愚直に、厭わずにやり続けたいと思っています

【岐阜大学】

COO+関係者の関わりをしっかりとやっていきたい。学内、地域の理解・共通認識を持って業務を進めていきたいと思っています

【新潟青陵大学】

大学で得たこと、地域社会、企業、取引先の課題との結びつけを意識したいと思っています。そのなかで自分にできることを模索し、実践していきたいと思っています

【岐阜大学】

COO+の目指すところを深化させ、次世代に繋げます

【福井大学】

COO+について学内の理解を愚直に広げていきたいと思っています

【福井県立大学】

学生 2班

福井の良さをもちと知ってもらうために活動していきたいと思っています

【福井大学】

福井に人が来てもらうためにSNSで情報を発信していきたいと思っています

【福井大学】

自分が体験したことをまずは周りの人に伝え、仲間を増やしていきたいと思っています

【富山大学】

岐阜大学に新しい教育方法を根付かせて、国際との提携を進めていきたいと思っています

【岐阜大学教員】

さまざまな人と触れ合い、自分の知識を深め、周りに還元することです

【福井県立大学】

常にアンテナを張って、自分からいろいろな体験をすることを恐れず、説得力のある人間になることです

【秋田大学】

教職員 2班

地域活動がスムーズに行くように学内・学外のパイプ役になるよう仕事を進めていきたいと思っています

【新潟青陵大学】

これまでは大人とのコーディネート活動が中心でしたが、今回を契機に学生の意見を直接確認し、それをプログラムに反映させることです

【秋田大学】

本日はいろんな人と話ができ、課題がたくさん見つかりました。先生や学生の立場に立って考えていこうと思っています

【福井県立大学】

熱意の継続、発掘です

【岐阜大学】

学生 3班

たくさんの方と触れ合えて、広い視野を持った看護師になりたいです

【敦賀市立看護大学】

これからの長い社会人生活で、好奇心を忘れずに新しいことに挑戦していきます。IT業界に就職するので、周りにない最先端の技術・システムを作っていきたいです

【福井大学】

いろんな人を支えられるように、目の前の課題に向き合っていて、少しでも世の中のためになる仕事をしたいと思っています

【お茶の水女子大学】

このプログラムを継続し、よりよくするためにもっと検討していきたいと思っています

【福井大学教員】

教職員 3班

さまざまな立場の次世代にいかにか伝えていくかを考えていきたいと思っています

【福井大学】

多くの人に伝える。楽しく笑う。ずっと続ける。以上です

【宮崎大学】

大学が地域、企業に溶け込んでいけるようにバックアップしていきたいと思っています

【岐阜大学】

建学の精神である仁愛兼濟、「つるわしい世を拓く灯」となるために、これに向けて学生最優先に立って未来に生きる人材の育成に務めていきたいと思っています

【仁愛大学】

今、単年度の実習プログラムを作っていますが、先輩と後輩が繋がることで、より広がる活動を推進していきたいと思っています

【秋田大学】

すべては学生のために頑張っていきたいと思っています

【福井大学】

学生 4班

地域の人と関わることが楽しくてしょうがないと共感して活動できる仲間を増やしていきたいと思っています

【富山大学】

聞き上手になる

【宮崎大学教員】

まずテーマを考える。それをもとに何ができるか考えていく。常に何をしたらよいか考える。勇者になれ。ピー・アンビシャス!

【岐阜大学】

子ども発達支援士を養成していますが、さまざまな子ども達と関わる中で言葉の大事さや難しさを考えます。言葉の影響に気をつけていきたいし、そのことを学生にも伝えていきたいです

【佐賀大学教員】

実践的な経験を大切に、今回のようなさまざまな方と直接関われる場に積極的に参加していきたいと思っています

【福井県立大学】

何でも疑問を持ってさまざまな体験に挑戦し、何か一つでも自信を持って伝えられるものを持つことです

【福井大学】

教職員 4班

自分だけではできないことを、教員・職員・コーディネーター・学生とともに互いの立場・苦勞も理解して協力して事業を推進していきたいと思っています

【三重大学】

日々の業務のなかでCOO+の取り組みが継続して評価されるよう、一つ一つの仕事を工夫していきたいと思っています

【岐阜大学】

地域の方が大学とともに何かやりたいと思うてもらえるように、地域とのつながりを開拓していこうと思っています

【岐阜大学】

COO+を継続発展するためには、教員をうまく使わないといけないと思っています。COO+をもっと知ってもらうために、周りの教員と話をする時にCOO+の話題を少しずつ出していこうと思っています。そのためにも私自身もっとCOO+を勉強していきたいと思っています

【福井大学】

学生・親・教職員が福井のことをもっともっと知る機会を増やしていこうと思っています

【福井大学】

私は人と関わることを怖がらず、人や支援の輪を広げていくことを宣言します

【佐賀大学】

地元への帰属感を高めるために好奇心を持ちながら積極的に地元や周りの美しさを発見することです

【福井大学】

地元愛を持ちつつ、他の地域のよいところに積極的に目を向け、保守的にならないようにです

【福井大学】

地方創生のチームを作り、地域づくりを増やしていくことを宣言します

【富山大学教員】

多様な考えを持つ人と交流したり、自ら体験して自分の知らないことを知ろうとする姿勢を誓います

【福井県立大学】

私は本業をベースに一粒で三度美味しいを目指して、楽しく、そして飲みながらやります

【和歌山大学】

ふくい地域創生士の制度を見習って率直な意見交換ができる地域協力者と学生・教員の。ありがたの輪作りしていきたいと思っています

【摂南大学】

世代年代を超えた活動のノウハウの共有、そうした場に積極的に参加していきたいと思っています

【福井大学】

身の丈に応じた活動を一つ一つやっていくこと。自分の思いを人に語るというのをやっていきたいと思っています

【大島商船高等専門学校】

いろんな方と連携を密にして、自分が今できることをしっかりと行っていきたいと思っています

【富山大学】

教職員 5班

学生・地域・教育、皆にとってよいプログラムになるようにコーディネートします

【岐阜大学】

私は本業をベースに一粒で三度美味しいを目指して、楽しく、そして飲みながらやります

【和歌山大学】

ふくい地域創生士の制度を見習って率直な意見交換ができる地域協力者と学生・教員の。ありがたの輪作りしていきたいと思っています

【摂南大学】

世代年代を超えた活動のノウハウの共有、そうした場に積極的に参加していきたいと思っています

【福井大学】

身の丈に応じた活動を一つ一つやっていくこと。自分の思いを人に語るというのをやっていきたいと思っています

【大島商船高等専門学校】

いろんな方と連携を密にして、自分が今できることをしっかりと行っていきたいと思っています

【富山大学】

学生 6班

就職してからも多角的な視点や、いろんな人の立場に立つて物事を考えていきたい

【岐阜大学】

いろんな人と積極的に話し、自分の見識を深め、地域活性化に貢献したいと思っています

【福井大学】

私は一人一人の子どもや保護者の支えになって、明るい未来に繋ぐサポートをしていきたいです

【佐賀大学】

4月から社会人になりますが、今関わっているボランティアを続けていき、それを通して福井に貢献していきたいと思っています

【福井大学】

就職してからも、消防団として活動しながらAEDの使い方や心肺蘇生法を広めて、一人でも多くの命を救うことです。またさまざまな活動を通して探った自分の意見を広められるように、発表できるようにしたいと思います

【福井県立大学】

皆さんのお話を聞き、COO+に取り組むことは、楽しいことなのだ改めて気付かされました。もっと楽しいCOO+プログラムを充実させますぞ!

【福井県立大学】

このサミットの2日目は、「地域創生」という同じ志のもと、世代、立場を超えて交流し、リフレクシオンを体験しました。一人一人から生まれた「ことば(宣言)」を、この報告書の編集者の気持ちを含めて、61名全員の写真とともに掲載させて頂きました。

【福井県立大学】

はばだけ地域創生士! サミット ワークショップ(宣言)



閉会挨拶

岐阜大学 理事(学術研究・情報担当)・副学長 野々村修一

学生の皆さんの宣言をお聞きして、お一人お一人のこの思いが地域創生につながるのだと思いました。そして大学職員の皆様もそれをバックアップしていくと言って頂きました。このCOC+事業は、これから具体的にいかに成果を上げていくかというところに入っていくかと思えます。

私自身は学生2班に入りまして、いろいろ面白いお話が聞きました。このプログラムを、なし得ることで、地元愛が増えているという言葉を頂き、我々の様々な取組も「意味があるのだ」と背中を押されました。これからは一つの「地域」に留まること無く、同じ志を持つ仲間と集まり、意見交換すること、

新たな化学変化が生まれていき、更に地域の持続的な発展に向けもっと仕掛けを大きくしていくべきだと思ひ、そのスタートが、岩井理事の発案されたこのサミットであるという認識に至りました。

今回のサミットの参加者が、



秋田から福岡まで非常に広い範囲からの参加者であることというところで、いろんな地域の方の意見を聞け、面白いと思ひました。さらにこれを発展させるのが良いのではないかと私自身も考えています。学生の皆さんも卒業した後、大学を訪問し「どうなっている？」と声をかけて頂くと、大学のスタッフも勇気づけられますし、地域に対してもどんだんアイデアを出して頂きたいとの願いを込めて、閉会の挨拶とさせて頂きます。

